

# 花 蓮

——開拓移民村について——

## 中村佐太郎

### はじめに

昭和20年(1945)、敗戦という悲しい運命に会い、人生のすべてを打ちこんで開拓した花蓮の山野に、限りない愛着の念にうしろ髪を引かれる思いで帰国した日本農民にも、はや36年の歳月が流れ去った。

今となっては当時の記録を求めることは困難な状態にあるので、調査に当たってそれだけに周到な現地調査を重視することにした。

開拓民の残した民家も、いまでは老朽化が著しく、あるものは新築、改造され、あるものは廃屋となって、急速に消滅してゆく状況にある。

開拓されてきた耕地もまた、今日の急激な都市化によって、住宅地・工場用地などに転用されるところが多くなっている。

他方農業の機械化に伴って既耕地の再編成が行われ、耕地整理によって、遺構は改変をうけ、開拓した土地割が消滅しつつあるほか、依拠する地図、統計資料も戦後散逸してしまっている状況下に、開拓移民村の究明はまことに差し迫った課題である。

本稿では花蓮南部に拡がる「吉野村<sup>1)</sup>」、「豊田村<sup>2)</sup>」を研究対象として居住地域発展の観点から地域的様相をとらえることにした。

### I 花蓮平野

花蓮は台湾東海岸の太平洋に面した港湾都市である。最近、スケール、景観の変化、自然の美しさからいって、天下の絶景といわれる大理石の「太魯閣峡谷」の素晴らしい景観がみごとである。台湾の中央山脈を東西に横断する台湾最大のハイウェイ「東西

横貫公路」の背景をなす山岳美などから観光地として有名となった。そのうえ台湾の首都台北からジェット機で30分という手ごろな距離でもあるので、まさに花蓮は台湾観光のキーポイントでもあり、交通上の要地でもある。

観光客の大部分は日帰りの人たちである。空港からバスで「太魯閣峡谷」めぐりをすませるとすぐまた空港に戻り、花蓮の市街地の一部さえも眼にすることなく立ち去って行く。ましてや花蓮南部に拡がる花蓮平野、そこに散在する町や村が、日本統治時代に日本農民の汗による開拓移民村であることなど、誰ひとり知ることなく、立ち去っていくのが実情である。

花蓮空港のある花蓮北方の台地から、南部地域を眺めると、花蓮平野は一望のもとにある。平野の東部は、中央山脈の2,000~3,000m級の山々が聳え、西部は海岸山脈が比較的ゆるやかな稜線を描いて走っている。この二つの山脈の間を、花蓮溪が山脈から流れ出る幾つかの支流を集めて南から北へ緩やかに流れ、台地の末端付近で太平洋にそそいでいる。

花蓮溪河口の前面は浜堤によって縁取られ、その内側には、低湿地が拡がる。花蓮溪の堆積作用は、ここまで及んでいない。花蓮市街の南東部は花蓮溪の堆積作用が十分及ばなかったため、この種の地形がもっとも広く展開しており、部分的には自然堤防ないし河口州の陸化した微高地が存在する。

最近、河川改修が積極的に進められた結果、よしの茂る湿地の一部は水田化しているが、養鱒池・アヒルの飼育池の景観を除いては広大な排水不良地帯である。

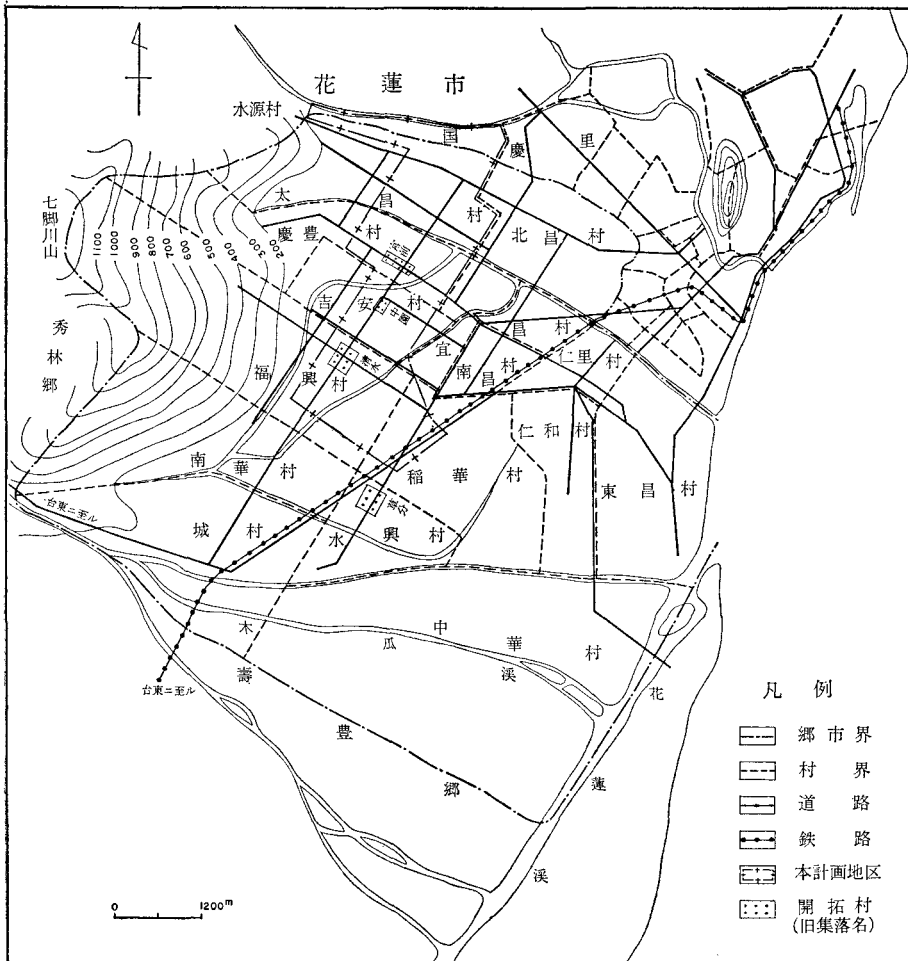


図1 吉安郷・花蓮市・國慶里行政区画図

## II 開拓移民村の経過と強制栽培

台湾鐵路台東線の始発駅「花蓮車站」から東南へ1 km ほど行くと広々とした浜堤がひろがり太平洋の打ち寄せる白波が美しい。ここが「南浜」である。

明治の末から大正にかけて、数千人の開拓者たちが花蓮にやってきたころは、花蓮にはまだ客船の横付けできる棧橋がなかった。そのころ花蓮と島内相互の交通は海上交通が主で、船は南浜から発着した。海は遠浅だったから、吃水の深い大型船は陸から遙かに離れた沖合に碇をおろし、乗客は船腹に斜めに

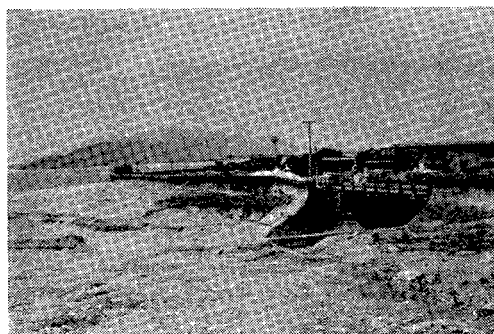


写真1 「南浜」より太平洋を臨む

かけたタラップを降りて小型の上陸用船「はしけ」

に乗りかえなければならなかった。太平洋の荒波によっては本船から「はしけ」に移ることができず、人も貨物も目的地を目前にしながら引返すこともあったという。また、季節によっては何日間も交通途絶という事態が起きた。かつての南浜には全く人影が無くなり、打ち寄せる波の音だけがのどかに響く静かな浜堤となってしまった。

移民たちがここに上陸したころ、ここから移民村へ行く道がどの辺を通過していたか、いまではもう分からなくなっているが、花蓮溪河口付近は低湿地が広がっているところから、おそらく海岸線に沿って北上し、一度花蓮の町へ入ってから西南の方向に曲がり、「田浦」を経て吉野村へ達したものと推定される。移民たちは荷物をトロッコ「手押軽便鉄道」に積み上げ、ときには女子供・老人たちをトロッコにのせて移民村に入ったものと思われる。

最初に官営移民として移住したのは、徳島県下から明治43年(1910)に9戸20人の農民であった。台湾総督府は日本の気候風土と異なる熱帯的農業の指導を行い、移民のモデル農家づくりを開始した。引き続き募集したところ応募者は意外に多く、四国・九州・中国地方の出身者を主体として集まってきた。

最初に移民となった人たちは「吉野村」に一戸当り3町歩の耕地と宅地の割当を受けて入植した。入植者は次第に増加し、明治44年(1911)には240戸となり、数年後には370戸、人口1,640人の農村に発展した。総督府は事業開始4年目の大正2年(1913)から吉野村の数km南部に官営移民村第二号の建設にとりかかり、「豊田村」と名付け「豊田村移民指導所」を開設して移民の入植を開始し、続いて大正3年(1914)にはさらに南下して官営移民第三号の「林田村」を定め、「林田村移民指導所」を開設した。吉野村の戸数が増加するに従って、新しい移民村は豊田村・林田村へ土地を割当てられて開拓に当たった。

当時台湾は「瘴癘しょうれいの地」としての暗いイメージが

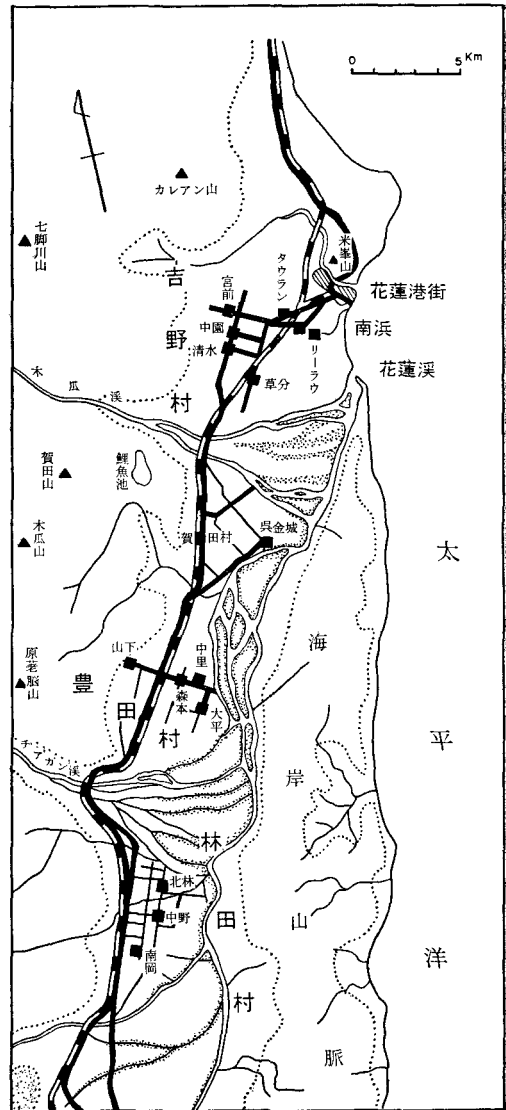


図2 官営移民村／吉野・豊田・林田

強かった。瘴とは山川によって生ずる毒気であり、河川や湖沼の多い湿地帯におこる病をさしている。台湾は高温多湿であり、風土は疫病を生みやすく、まさしく瘴癘の地であった。その上花蓮は台風の進路にあたることでも有名である。移民たちはこれらの自然の敵と闘いながら、異国の地で一緞一緞汗を流した。

移民たちを苦しめたのは、風土病や台風などの自

然の強敵だけではなかった。開拓の当初、移民村の主要農産物は甘蔗であった。大正6年(1917)の吉野・豊田・林田官営移民村の農産物は、金額で比較して吉野村の場合、甘蔗が米の5.6倍に達している。吉野村より遅れて開拓が始まった豊田村では27倍、<sup>3)</sup>林田村では130倍にもなっている。

吉野村での米の生産は、大正6年(1917)開村6年にしてようやく自給出来る程度であった。

総督府は明治38年(1905)製糖揚取締規則を公布<sup>4)</sup>し、製糖工場の設立を許可制とし原料採取区域を規定し、製糖工場の安定を図った。このことは生産者や原料価格に対する工場側の支配力を強める結果ともなった。

昭和18年(1943)以降、食糧増産のため甘蔗の生産は激減した。総督府が産業開発事業として第一に着手した製糖業は終始、台湾の基幹産業として台湾の経済を支えた。

表1 台湾における製糖会社の設立状況

年次	会社名
明治33年	台湾製糖株式会社
明治39年	明治製糖株式会社
〃	ペイン商会製糖株式会社
〃	大東製糖株式会社
〃	大日本製糖株式会社
明治40年	東洋製糖株式会社
〃	塩水港製糖株式会社
〃	台南製糖株式会社
明治41年	新興製糖株式会社

(森久男：台湾総督府の保護政策の展開より)

入植時代の苦難と混乱を乗り越えて、昭和の初期<sup>5)</sup>を迎えた吉野村は、清水半平氏をリーダーとする産業組合を中心にようやく安定してきた。

このころには心のよりどころとしての吉野神社・寺院も建てられ吉野村35年の歴史の中で貧しいながらも「<sup>6)</sup>良き時代」であったと言えよう。

### III 移民村の現況

台湾の農村では、一般にレンガ造りの平屋建て民

家が多く見られるが、花蓮市及び南部の移民村には日本統治時代の木造家屋が見うけられる。これらの農家を一軒一軒たずねてみた。家屋の前に立った時、目がしらが熱くなり、しばらくたたずむ。昭和53年(1978)訪台を思いだす。

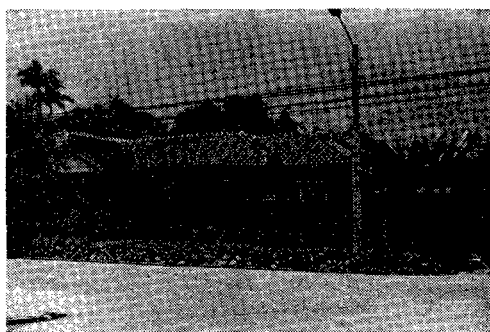


写真2 郵便局・日本時代のもの、現在台湾の人の住居(吉野村字中園にて)

「<sup>7)</sup>四十年に余る昔にわれ住みし家は軒端の朽ちて残り」

「<sup>7)</sup>廢屋となりて残るや我が官舎時と国籍のへだたり遠し」

これらの「家屋」は移民の生産の場であり、活動の場であり、憩の場であった。しかしこれらも、年月のたつにつれ、また、生産様式の変遷改変をうけ、急速に消滅していく傾向にある。

家のまわりには屋敷林をつくってあるが、台風常

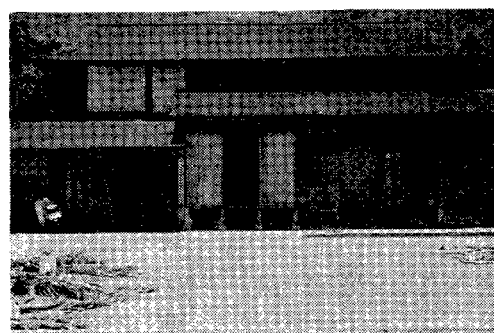


写真3 現存する移民家屋(豊田村字山下にて)

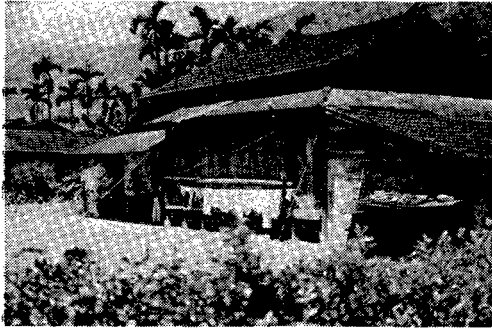


写真4 現存する移民家屋（豊田村字山下にて）

習地帯の性格をみせている。庭の中にはかつての住人が植えた竜眼がみごとに実をつけている。いまの奥さんが親切にもぎとってくれる。竜眼は色はこげ茶であるが、口に入れる前に手で簡単にむけて、さっぱりした甘さをもつ果実である。

この地方では二期作（後期作）の田植が終わったばかりの水田がほとんどである。このところ機械化が進み、機械植えが主であるが、所々手植えをしている農民の姿が見うけられる。

戦後の区画整理によりかなり景観が改められた。しかし主要な道路・畦畔・水路は依然として日本統治時代のものである。

整然とした景観こそ戦後における変貌の一つとしてとりあげてよい。

## むすび

1 開拓移民村の開設は、海岸に比較的近い花蓮市南部から次第に南下して拡がったものと思われる。

2 製糖会社の設立を追うようにして、総督府は移民事業を実施した。近代的大製糖工場の進出は、原料生産者と原料確保として開拓村の建設をうながしたように思われる。

3 資料が散逸し、資料の入手が困難で文献を手もとにとどめおくことのできない事情から、現地調査を格別重視した。その結果、なお多くの問題を残しているため、今後研究を継続していくつもりである。（鳥取県立倉吉西高等学校）



写真5 用水路（吉野村字宮前・中国の村落境界になる）

〔付記〕 本稿は1978・1980・1981年夏調査したものをまとめたものである。現地調査に際し格別お世話になった現地の関係市町村、学校の方々に深謝の意を表するしだいである。

## 〔注〕

- 1) 吉安郷（旧吉野村）の移民村  
慶豊村（旧宮前村）  
吉安村（旧中園村）  
福興村（旧清水村）  
永興村（旧草分村）
- 2) 寿豊郷（旧豊田村）の移民村  
豊山村（旧山下村）  
豊裡村（旧中里村・旧森本村）  
豊坪村（旧大平村）
- 3) 福田桂二 「台湾移民の70年」世論社、1978、57頁
- 4) 篠原正巳 「台中 日本時代の50年」サンプリング、1980、165頁
- 5) 清水半平氏は明治44年（1911）第3回移民として吉野村に入り、その後吉野村村長となる。
- 6) 清水半平「吉野村回顧録」1971
- 7) 磯田福春「歌集 椰子の島慕情」1979、8頁。1978年筆者と訪台する。